ろいろのきぬしておほひたるものにて絹笠なり、〇下略

〔類聚名物考調度二〕きぬがさ　蓋　涼傘

古へは皇朝にても鹵簿に用られたり、令によれば形四方なりと見ゆ、今佛家に用る天蓋もまた四角なり、これも古への形はのこりたる物なれば、たがふまじきことなり、さるに万葉集に月暈またはおゝがしはの葉を蓋にたとへたる事有り、是はおほよそにいへばにや、又は丸きも有りけるにや、明和元年の春、朝鮮使の來りしを見たるに、淺葱の蓋をさしたるに、よのつねの長柄傘の大さにて、骨は六本か八本ばかり付たれば、角のさしはりて六角の樣に見えし、もとより緣にはまた水引を付たり、琉球使の蓋も見たるに、是は二蓋なり、ほねはつねの長柄傘の如くして丸し、又華嚴經に蓋雲といふ事有り、これらも丸きをいふなるべし、

〔新撰字鏡人〕傘、繖、鹵傘、奚、傘、六形同、先岸桑爛二反、蓋支奴加佐、

〔晉書八十三王雅傳〕王雅字茂達、東海剡人、〇中略會稽王道子領太子大傅以雅爲太子少傅、〇中略少傅之任、朝望屬珣、〇王珣亦頗以自許、及中詔用雅、衆遂赴雅焉、將拜遇雨、請以繖入、王珣不許之、因冒雨而拜、

〔大金國志三十四〕車繖〇中略

國主繖、或紅、或黃、無定、以金龍爲頂蓋、后用金鳳、太子用金龍、妃紫繖、用金孔雀、一品青繖、用銀浮圖、二品三品用紅浮圖、四品五品青浮圖、

〔古今要覽稿器財〕菅蓋　菅大笠

菅蓋の形狀いまだ詳ならず、但大嘗會畫圖に供御の料に、菅蓋といひ傳へたる圖有、延喜式に見えし菅蓋物にや、蓋とのみいふは四角なるものなり、儀制令に頂及四角覆錦垂總とみえ、內宮送官符にも方五尺七寸、頂幷肆角上覆錦などみえたれば、正しく佛家の天蓋に似たるものなり、大